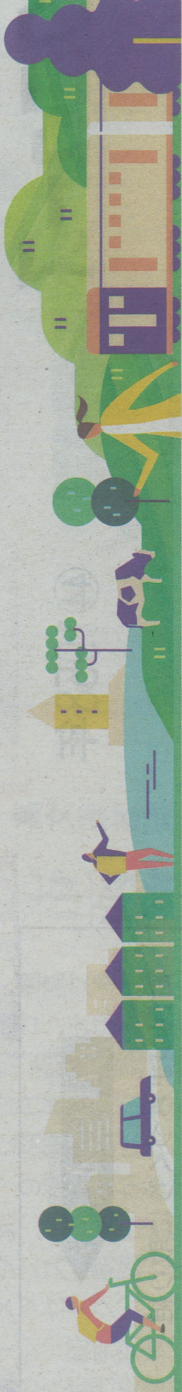


# 25 旅



## 北斗・石別地区

# 紅葉彩る 洞窟のマリア像



赤とんぼをデザインしたステンドグラスがはめ込まれた「あかとんぼばし」=地図④

やさしい笑顔で送り出してくれた「中田商店」の中田トモエさん=地図①



▲紅葉が始まったばかりの「ルルドの洞窟」。マリア像が見える=地図③

函館の五稜郭から直線距離でおよそ25キロ、北斗市の石別地区は三ツ石と当別を合わせた地区。五稜郭駅から道南いさりび鉄道で約45分、渡島当別駅で下車し、石別地区観光推進事業実行委が作った地図を手に、自転車で回ってみた。

自転車を借りるのは駅前の「中田商店」(当別4)「地図①」。店主の中田トモエさん(73)が「この辺は

電動でないと上つていけないからね」と言うように、石別は急な坂ばかり。電動アシスト付き自転車は必須だ。

まず回ったのがトウリスト修道院(三ツ石392)「地図②」。何度も来たことがあるが、今回は曇手の

「ルルドの洞窟」(同3)に初めて行った。カトリックの巡礼地として有名なフランスの「ルルドの洞窟」を模して造られた。途中に自転車を置き、徒歩で山を登る。ゆるやかな坂だが結構きつく、何度も立ち止まりながら階段を上る。たどり着いた先には、少し赤く色ついたツタのかわらまき岩壁の中にマリア像が。展望台からの景色も最高だ。



▲「ルルドの洞窟」の展望台。ここから見る津軽海峡と函館山の眺めは最高=地図③



◀「ギャラリイ一日の丘」の上田雅さん=地図⑥

▲「風の丘」のバーカウンター席で、窓の外の水水平線を眺めながら食べたピザ=地図⑦



## 「みなみ風」 創刊25周年

「お疲れさま」と声をかけ合ったのは、札幌から来たという相築泰緒美さん(59)。「トウリストには何回か来たことがあったけど、ルルドは来たことがなかったの」という。御朱印をもらいながら、道南の神社やお寺を回っていると、

並木道を下り西へ向かう。空は青

く風は爽やかに快調にペダルをぐままなく、赤とんぼのステンドグラスがはめ込まれたあかとんぼばし「地図④」を発見した。当別は、トウリストに文学教師として滞在していた詩人三木露風が重謔「赤とんぼ」の詩を書いた地だ。さらに進むと、サッポロビールのライン用のブドウ畑「地図⑤」も。通ったことがないこの道、新しい発見が続く。

次の目的地は「ギャラリイ一日の丘(三ツ石347)」(地図⑥)。2008年に木彫作家の故上田公夫さんが開設し、何度も取材で来たことがあるが、今日はいるだろうか。と建物の裏手に回ると、妻の上田雅さん(82)の姿を見つけた。元氣な笑顔で「あら、久しぶり」と迎えてくれた。

ギャラリイは新型コロナの影響で昨年からの展覧会は休んでいるが「わざわざ来てくれる人もいるので、土日はいるようにしている」そう。眺めよい窓際の席でちよこ二眼。名残惜しく手を振り、ログハウスカフェ「当別風の丘」(当別406)「地図⑦」へ。

「風の丘」は仲間たちが週末に集まってログハウス造りを楽しむところからスタートし、現在はカフェや宿泊施設も。オーナーの藤山幸伸さん(69)は「道南アキを活用し、自然の中で手づくりを楽しんでいる」と話す。今日のランチは、このカフェのピザ。「ぜひ見てほしい」と通されたのは、バーカウンターのある部屋。窓からくっきり見える水水平線が美しく、ピザとともに絶景も満喫した。

「風の丘」を後にし途中、昔親戚が住んでいた石別小学校周辺を回り、出発から時間で中田商店に到着。コートをごらそうになり、帰りの列車に乗った。自転車で走行距離は約16キロ。25キロに少し足りない分は、帰りの「いさ鉄」の距離を足すことになって、石別の旅を終えた。

内田豊子が担当しました

秋のたのしいイベント!

家族でたのしい **パンづくり**

先着6組 参加無料

コロナ禍ですっかりおうちごはんと定着しましたが、新しいレパートリーにパン作りはいかがですか。お子さまも一緒に家族そろって楽しい時間をすごしませんか?

11/20 時間/13:30~15:30

北海道新聞の秘蔵写真&映像が満載 DVD 青函トンネル開業30年

世界的な難工事だった津軽海峡下を貫く全長約53キロにおよぶ青函トンネルは1988年3月13日開業した。同じ日、80年にわたり北海道と本州をつなぐ人と物流の大動脈であった青函連絡船はその役割を終えた。この青函トンネルを現在、北海道新幹線を引き揚げられた「洞爺丸」

青函連絡船「松前丸」

色のテープで送られる「十和田丸」

吉岡海峽を通過する一番列車「はつかり10号」